SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス

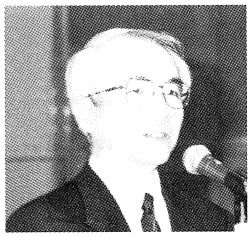
No.152
1998.7・8・9

■わが大学
恵泉女学園短期大学　学長　大山綱夫　／2
東京純心女子大学　学長補佐・教授　杉浦太一　／3

■座談会　大学審議会答申（中間まとめ）
「21世紀の大学像と今後の改革方策について
──競争的環境の中で個性が輝く大学──」を語る／4.5.6
■教育プログラム報告
第35回大学教員懇談会　／7.8
第16回大学教員研修プログラム　／9
■法人ニュース　／10
■千人会
ご入会ありがとうございました　／11
会費ありがとうございました　／11
千人会のおたよりから　／11.12
追悼　／12
■寄贈図書　／12
■寄付　／12
■業務通信
わたしたちの合宿　／13.14
■ひとこと　／14
■利用状況　／15・16
■館長室から　／16

Plain living and high thinking

財団法人　大学セミナー・ハウス
INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, INC.
ホームページ　http://www.mesh.ne.jp/iush/



変革と継続と ー女子高等教育のニーズに応えてー

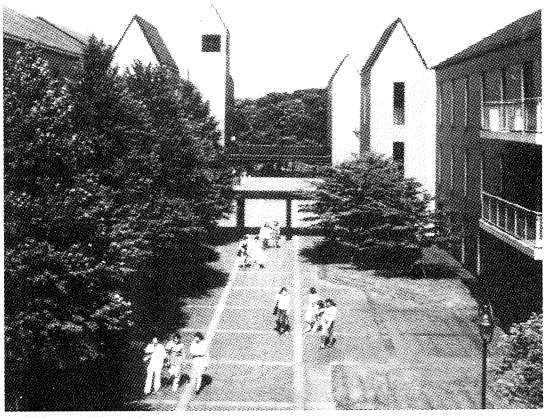
恵泉女学園短期大学学長　大山　綱夫

恵泉女学園短期大学は、一九五〇年英文学科（発足当時の名称は英文科）と園芸生活学科（発足当時は園芸科）の2学科をもって発足し、短期大学制度と同じ長さの歴史を歩んだが、2学科のうち英文学科（入学定員三〇〇名。キャンパスは東京都多摩市）を一九九八年度末で閉じる（予定）こととなった。この計画に従って本年度の入学試験を行わなかったため、在学生は2年生のみであり、彼女らを送り出せば、英文学科は約半世紀の歴史に幕を下ろすことになる。

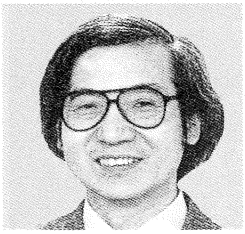
一方、一九八八年に開学した四年制の恵泉女学園大学人文学部（短大英文学科と同キャンパス）は、既設の日本文化学科と英米文化学科に加え、本年度新に、短大英文学科の特色のひとつ「国際」コースの教育を取り入れた国際社会文化学科を開設し、3学科構成となった。しかし、規模の点では、英米文化学科と国際社会文化学科が、短大英文学科の入学定員相当数を受け入れる形をとったので、多摩キャンパスの本年度の学生数は、基本的には変わらない。ちなみに本年度の大学人文学部の入学定員は、日本文化学科九〇名、英米文化学科二一〇名（このうち英文学科定員からの移行相当は一〇〇名）、国際社会文化学科二〇〇名（英文学科からの移行相当二〇〇名）、計五〇〇名であった。この数の中には、大学と短大が抱えてきた臨時的定員が含まれている。この臨定による学生数は二〇〇〇年度から漸減し、5年間で半減することになっている。

短大のもうひとつの学科、園芸生活学科は、神奈川県伊勢原市にあり、入学定員一〇〇名で園芸教育の理想から全寮制をとっている。園芸界での評価が極めて高く、当面は短大教育の一層の充実に努めているが、21世紀に相応しい将来像構築は大きな課題である。

以上が恵泉女学園の高等教育部門において進行中の変化の概要であるが、大規模校の改組転換に比べれば小さな改革ではあろう。しかし、ここに至るまでには学園の創立の理念の議論をはじめ、実務上の調整に至るまで、小世帯なりに注がれた労力と時間には莫大なものがあり、なによりも短大英文学科がなくなるという事実を前に関係者には様々な感慨がある。



恵泉短大関係者が特別な感慨を抱くのは、本学が日本における短大制度設立の最も強力な提唱者河井道によって建てられた事実によっている。戦後、政府の教育刷新委員会委員に任命された河井は、女性の立場から日本の高等教育の改革に提言を求められた。同委員会は、高等教育は男女を問わず四年制大学制度を整備することで、いったんは合意したが、彼女は、当時の女性の置かれている社会経済的状況から、四年制だけでは女子の門戸は広がらないと考え、二年制の大学制度の併設を提唱し、短大制度の設立に成功した。激しい論議の様子は、同委員会の第46、49、86回総会議事速記録で知ることができる。彼女の判断が正しかったことは、その後短大が向学心のある女子の有力な選択肢となり、女子の進学率を上昇させたことから明らかであろう。アメリカで成功していた短大制度に精通していた彼女は、恵泉短大に2年完結型と四年制への連結型のふたつの性格を持たせ、教育指導上の配慮をし、学生のニーズに応えた。以来、本学はこの性格を大事にしてきた。ところが一九八〇年近辺から新しい傾向が感知されるようになった。英文学科の場合、学生の関心領域が文学・語学に限定されず、人文・社会の多領域に広がってきたことと、連結型の短大教育を選ぶ学生が増えたことである。恵泉女学園高校の父母の中からは四大設置を望む声も聞かれ始めた。こうした状況の変化を受けて、80年代前半、四大化をも視野に入れた短大改革が動き始めた。当時依然として短大需要はあったが、向学心のある女子をとりまく状況が改善されつつある時代に、創立者の志を継承・発展させる道と判断したのである。学園は学内外の諸状況を検討し、短大と併存する仕方で四大を開設する道を選んだ。しかし、その時点で短大の四大化のシナリオを描かなかったために、暫くは短大・四大両者の協調的共存が課題となった。この間、かつて短大を目指した層が四大へ向かう傾向はますます強くなった。協調的共存から短大と四大の統合を目指す方向へ転轍が行われたのは、一九九二年短大・四大それぞれに新学長が就任してからである。理事長・学園長の時宜を得たリーダーシップもあり、短大・四大合同の「恵泉女学園高等教育将来計画委員会」（計画の進捗状況に応じて何度か改名）が発足、約3年半をかけて、短大英文学科の廃止・四大の国際社会文化学科新設による統合という結論に至ったのである。廃止を惜しむ高校や企業の声、また淋しさを感じる同窓生の声も聞かれたが、英文学科の新しい誕生として理解していただけたことは幸いである。短大はセミナー・ハウスを、20年近く準協力会員校として使わせていただいてきたが、来年度からは四大へバトンを渡す。末筆ながら、長い間学園外から短大英文学科へ頂いたご理解やご支援に心から感謝したい。



21世紀・女子大、一つの試み

東京純心女子大学学長補佐・教授　杉浦　太一

20世紀から21世紀

「21世紀を支え、担える女性の育成を！」多少の気負いは含まれているが、正直、この言葉の中に、短大を改組して四大開設に踏み切った私達、東京純心の思いがある。新しい世紀だから新しい教育を、という訳ではない。思いの背景にあるものを挙げるならば、第一のものに、今私達の中にある〈変えなければならない〉という強い認識があろう。もちろん幾多の難題・課題を抱えた「現代」という時代状況にたいして。言うまでもなく近代化は物の豊かさと便利さを人々に与え、それと引き換えにこころのそれも含めて人々から「自然」を奪い取った。現代人の生活はこの矛盾の中に言わば「引き裂かれて」ある。一九八〇年代出現した「コンビニ」がその象徴かもしれない。コンビニの主力商品は弁当であり、弁当は常に入れ替えられ、即座に（レンジで）温められ買手の内的自然を回復させる。しかし不特定多数者の即座の需要に応えんがために、それこそ大量の弁当が時限切れでゴミとなり、外的自然を侵していく。人間の健康はそれを養う生産の場として言うまでもなく外的自然を必要とするが、人間のこころはそれ以上に癒しの場としてそれを必要としている。食料の生産は機械化された工場でも可能だが、ここの癒しはそこではできない。人間のこころに不可欠なものとして風景としての自然（landscape）が今、大きな問題となってきている。風景は決して手付かずの自然を意味しない。代々のいのちや生活の営みが包み込まれ、立ち止まり、佇み、眺める者に安らぎと懐かしさをもたらすような景色をいう。懐かしく優しい風景があるいは人を立ち止まらせ、眺めるゆとりをつくりだすのかもしれない。そして人間はこのゆとりの中でこそ謙虚に自己を振り返り、人生を実感する生きものなのではないだろうか。そうすると「風景」は必ずしも自然にかぎらないことになる。文化や伝統の中にもさまざま風景を探すことができるのかもしれない。ともかく、現代という時代状況が抱え、21世紀へ向かって解決を迫っている大きな問題がここにあることだけは確かである。20世紀の物質文明と効率主義のなかで私達が見失ったゆとりとしての風景を再発見し、新しい形で取り戻さなければならない。大学教育という場で私達は一体何を考え何をなすべきか。私達、東京純心の得た結論は「文化」と「感性」という二つの言葉であった。

女子大、一つの試み

「21世紀は文化と感性の時代にしたい！」20世紀の物質主義と、今日私達がしっかり身に付けてしまった冷たい知性に対する深い反省に根ざした思いであり、願いである。物質主義とは物を所有することが生（生きていること・生きること）の実感・中心となり、目に見えないものを手で掴める物や金に置き換えようとするこころの病理であり、冷たい知性とは生きものも含め物事を離れてながめ、出来るだけ客観的・支配的に分析整理し、尚且つ管理しようとする精神のゆがみである。病理やゆがみならなおすことはできる。私達日本人ばかりでなく世界中を震撼させた地下鉄サリン事件や中学生による神戸での猟奇的殺人事件、そして今報道をにぎわしている毒物カレー事件、みな現代社会の真ん中に知らない間に口を開けた深い奈落をみる思いである。奈落をふさぐ特効薬はおそらくないだろう。しかし探せば、幾世代かを視野に着実に直す道はきっと見つかるのではないだろうか。私達も大学という立場と、「文化」と「感性」というキーワードでその道を懸命に探したいと考えている。人間は文化を創る動物である。他の動物（哺乳類）は環境に見合った毛皮をそれぞれ持っているのに人間だけはまる裸。文化は人間が温もりや安らぎを得るために作り出すいわば毛皮のようなもの。感性は文化を生み出し、つくりかえていくための大事な力。人間的体温で知性を包み決断への勇気を与える力。私達、東京純心女子大は真の文化の意味を学生に伝え、文化再生の道を学生とともに探していきたいと願っている。文化再生の命運は感性の輝きにかかっている。知性と感性、分析し統合する力と接触し同化する力、この二つの力は分かち難く支えあって文化創造を担っている。人の性、男性と女性、これもまた支えあい補いあってそのいのちの営みを担っている。いましわ枯れた男性的知性に文化再生の力を吹込めるのは女性的感性の輝き。ものごとに優しく触れ、包み込み、同化する力の可能性を「女子教育」という言葉にかぶせて考えていきたい。だから私達は21世紀も「東京純心女子大」、「現代文化学部」。そして文明の国際的広がりの中で感性を研き、健康な知性を築く努力を学生と共に続けていきたいという願いを込めて「英米文化学科」と「芸術文化学科」。人の個性と人生には出会いが大事、大学の個性と教育には小さくても確かな理念とそれを学生と共に実現していこうという強い信念が大事。そんな思いのなかで来年、東京純心女子大は完成年度を迎える。

座談会（平成10年9月21日）

大学審議会答申（中間まとめ）「21世紀の大学像と今後の改革方策について――競争的環境の中で個性が輝く大学――」を語る

出席者　平野　健一郎　大学教員懇談会企画委員長
早稲田大学教授

絹川　正吉　大学セミナー・ハウス常務理事
大学教員研修プログラム委員長
国際基督教大学学長

司　会　佐野　博敏　大学セミナー・ハウス理事長・館長
大妻女子大学教授

佐野　教育改革に関する国の提言や答申が相次いで出されましたが、大学セミナー・ハウスに関わりの深い大学審議会の答申について、大学教員懇談会（略称：懇談）委員長の平野先生と、大学教員研修プログラム（略称：FDプログラム）委員長の絹川先生に忌憚のないご意見を伺いたいと思い、お越しいただきました。まず、先生方は答申をご覧になってどのようなことを感じられましたか。

答申の理念

絹川　まず大学審議会の答申のタイトルの「競争的環境」ですが、世の中が常に競争的であるのはわかるとしても、それが昨今の社会的な問題を起こしているのに、いま大学を考えるとき、フィロソフィーとしてそういう言葉が妥当なのだろうかと気になりました。同じく「個性」という言葉もあります。いま初等・中等教育における大きな問題が「個性」ではない「自我」の肥大化した子供たちに対応できない状況になってきています。本来の「個性」を語るためには、その社会性を問題にしなければなりませんが、その点からもこの答申のフィロソフィーは何なのだろうと思います。

平野　このタイトルの主語が学生なのか大学なのかがはっきりしないところが気になりますね。

絹川　何となく大学と学生の両方にひっかけているような感じがします。

平野　標題に「21世紀の大学像」とあります。ところが、21世紀の大学像が充分には語られていない。だからフィロソフィーは何なのだろうかということになるのではないでしょうか。私個人としては、21世紀の大学のフィロソフィーは「学生が生き生きと勉強する大学」ということではないかと思います。そして、そのために大学教員がしなければいけない努力がたくさんあることも認めます。

絹川　世界全体が不透明な状況下で理念やフィロソフィーを問うのも酷ですが、やはり一国の教育政策を提示するのに基本理念がないというのは残念ですね。

佐野　「今後予想される複雑な状況の中では、学長のリーダーシップが求められる」などと書かれているのに、教育行政全体のリーダーシップが読み取り難いということですか。

絹川　理念を語っているとすれば、第2章でしょう。21世紀の社会状況を展望して、「一層変化が激しく不透明な時代」で、「地球規模での競争と協調・共生」が求められる。その中で「少子高齢化が進行し」、「産業構造や雇用形態に大きな変化」が起こる。最後に、「産業や雇用の空洞化、少子高齢化による経済の潜在的な成長力の低下、高齢化に伴う社会保障給付の増大などにより、当面は、引き続き厳しい財政状況が続く」と展望しています。結局、本音は経済の問題ではないでしょうか。この答申には「社会のニーズ」といった言葉があちこちに出てきます。現実に生きていけるかどうかの経済的な問題をきちんと解決できないような教育では困るんだというような姿勢が強く感じられます。

佐野　それは至る所に出てきていますね。「国土も狭く、天然資源も少ない我が国にとっては、人々の知的創造力が最大の資源」であるから教育は大切だと。端的に言えば、教育して豊かな国にしようじゃないかという考えでしょう。

絹川　その発想からは効率や効果ということが非常に大きな問題になってくるでしょうが、果たして教育の本質に効率概念がマッチするでしょうか。

佐野　分野によってはそれで進展する場合もあるかもしれません。ただそれが教育の本質だろうかという点はありますね。

絹川　企業への忠誠心を持つような学生を育ててほしいという考えに対し、学問への動機付けはそんなものではなく、もっと世界規模、地球規模において人間としての生き方に共鳴するようなものだと大学人は考えたい。本当に目の見えている人たちも直接的で効率的な教育効果だけでは実はだめなんだと仰っておられます。そういう意味で、答申にはもっと本質的な視点から世界観や教育観を示してほしかったという気がします。

佐野　教育に効率主義が入ってきてから、いじめなどさまざまな教育環境汚染が始まりました。効率はある程度は背後にある必要はあるかもしれませんが、それが前面に出ると必ずマイナス面が伴うということを考えておかなければいけません。教育の分野でも環境汚染はいったん始まると元に戻すのが大変です。

　昔にくらべいわゆる理工系の教育投資の額が増えてきた代わり、基礎研究で具体的な結果が出ないと無駄遣いをしているとされる、という声があります。

絹川　それが答申の場面で現れてくるのは、学部の教養教育の強調と、大学院重点化という専門主義とのミスマッチでしょう。これは私どもの責任でもありますから、もちろん一方的に非難はできない。現代の苦悩の現れとして大学人も一緒にそれを担わなければならないと思います。

平野　「科学技術創造立国」という言葉が何度も出てきますが、これは何年か前の科学技術基本法からきているのでしょうね。

絹川　その科学技術基本法が、財政配分に特徴を出すことの根拠になったわけです。その科学技術基本法で財政配分の対象には原則として人文科学を含めないとあるのですが、今回の答申でも、特に国立大学に関しては科学技術に偏向しているように見えます。その一方では学際領域の強化といった一種の総合性を主張している。今は、かつての理系か文系かという二極化ではなく、トータルに人間の知を問うことが求められている時代です。明らかに時代のニーズは人文科学の排除ではなく、総合なのです。答申では総合的な問題意識を持たなければならないのに、具体的な提言になると科学技術の方に偏向してしまう。そこに今の日本の問題状況が現れているように思えます。人文科学を排除したかに見える科学技術基本法の補足がこの答申の中に出てくるかと期待しましたが、そこまではいっていない。

知力を生む「ゆとり」とは

平野　この答申の外面的な問題は、殆どが「何々することが必要である」という言葉で終わっています。誰が誰にやれと言っているのか全く分からない文章になっている。これは現場の大学や高校のことから遊離して書かれてはいないでしょうか。

　内容面では、21世紀にあるべき大学というフィロソフィーよりも、余りに具体的な話ばかりが並べられているということが問題だと思います。

絹川　たびたび出てくる「社会のニーズ」という言葉に対して、今度は「現代の学生のニーズ」、平野先生のお言葉で言えば、「学生が生き生きできる」ような視点から大学問題を考えると大分違ってくると思います。特に最近の大学生はアイデンティティ確立の時期が遅れていますから、その状況に対応した大学のあり方というものも考え直さなければ、社会のニーズに応える学生すら養成できない。この「社会のニーズ」というのは「すら」の範囲なのですが（笑い）。

　今回のFDプログラムは、学生の動機付けを中心のテーマに掲げました。この答申では学生側ではなく、教員や大学の制度から見た視点なので、FDプログラムに参加された先生方の現実の悩みとは噛み合っていない。しかも、高校までの教育課程の問題を先送りして大学に全てしわ寄せがきています。

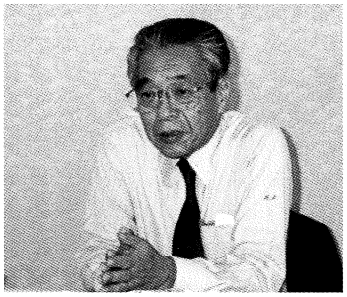
佐野　ある大学の教育学の先生が、今の幼稚園から企業までの教育環境を考えると、せめて大学の期間ぐらいは休ませてあげたいと仰ったんですが、ある意味では学生のニーズはそういうものかもしれませんね。

　中教審とそれを受けた課程審が、小・中・高の学習項目を削減したり選択制にしたりで、ますます学力を低下させるのは明らかです。しばらく前までは諸外国から見ても日本の初等・中等教育は少なくとも知識量だけは非常に立派なものでした。それにくらべて大学教育はレジャーランドで学生は遊んでいるし、教員も遊んでいるというお定まりの批判になりました。したがって、この一連の動きは欧米に近づけようとする教育行政の方針とも言えるのではないでしょうか。

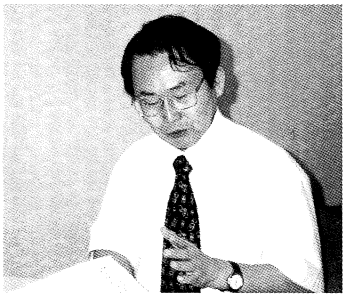
絹川　ところが、大学受験があるから現実の子どもは高校まではゆとりがないんですね。

佐野　それは過渡期だからで、これからの学生は一番損な学生だと言えるでしょうね。

平野　しかも、今は就職も厳しくなっていて、ますま



◀佐野　博敏氏



◀絹川　正吉氏

◀平野　健一郎氏

すレジャーランドではなくなってきています。

絹川　今が過渡期とすると、いつかは良くなるんですか。

佐野　良い悪いは別にして、欧米並みに、初等・中等教育ではたとえ知識量は少なくても、中教審の言う「ゆとり」で「生きる力」を身につけておけば、大学でしごかれてもついていけるということでしょう。

大学のクオリティー

絹川　高校までゆとりをもたせて、大学でしっかりやれば知力がつくかというと、それは違います。かつてはいろんな統計で、日本の子どもたちの知力はトップだった。ところが最近は悪い。典型的な例を挙げると、今中学生で数学が嫌いだという割合が40％を越えており、欧米に較べて極端に悪い。私は数学というのはまさに知力の象徴だと思っています。結局日本の教育はカリキュラムの多様化といってアラカルトで子どもの知力をどんどん下げていっている。基本的なところはしっかり押さえた後でゆとりを持たせるのならいいですが、今は基礎学力の部分まで多様化してしまって、本当にものを考える力を養わないまま大学に送り込んでおいて、それで大学で何とかしろっていうわけですね。大学では遅すぎますよ。

佐野　中教審の答申では、調査に基づいた厳選とのようですが、小・中・高・大の先生方が十分に協力して何を学んでほしいかをもっと慎重に検討する必要がありますね。それなしに子どもたちの実態調査だけで嫌いなものは外すというのでは偏食になり、知力は落ちてしまいます。

平野　7月の教懇でも、小・中・高・大のカリキュラムの根本的な検討によって、正しい連携を再構築しなければならないという結論が出ました。

絹川　大学問題だけを扱うのではなく、トータルに日本の教育課程全体の中で大学の問題を取り上げないと問題解決になりませんね。

平野　先ほどの、今が過渡期だという話に戻りますが、レジャーランドでもいいじゃないかということは、それを生み出したのは大学、もっと具体的には大学入試で、小、中、高と偏差値だけでやってきたからですね。しかし、この答申では「別途、大学入試に関する専門委員会において、引き続き検討を進めている」として外してあります。

絹川　本当は、大学の入試改革をどうするかが一番大きな問題ですね。

平野　私も完全に同意見です。ところが、それを外しておいて、その代わりに過渡期の具体的な方策として出しているのは、大学の成績評価を厳格にし、留年させるべき者はさせ、留年対策をきちんとしろという方針です。先ほど絹川先生が仰った大学へのしわ寄せなのでしょうが、これとは別の方策を立てないと、やはり過渡期もうまく乗り越えられないのではないでしょうか。それと似たようなことで、一方ではきちんと単位を取らせろと言っているのに、他方では欧米型の大学並に科目を減らし、予習復習をさせるような教育を奨励している。どちらに重点が置かれているのでしょう。

佐野　おそらく両方でしょうが、全体の流れからいくと国際化というのも一つのキーワードでしょうから、欧米の大学がやっている程度には持っていきなさいということかと思われます。

絹川　FDの領域になってきましたが、クオリティーコントロールとして、成績評価は厳密にせよ、単位制度の実体を作れ、セメスター制、GPA、科目登録の上限設定、授業法、FDを努力目標として大学設置基準において明確にするなど随分細かく書いてあります。FDは努力目標ですから、やっていなければ文部省から注意されるので、どこの大学もやらなきゃいけない。これでは大学教育はパターン化してがんじがらめになり、佐野先生が仰った大学の本質的機能であるゆとりが欠けてきてしまうわけですね。

佐野　新しい大学や小さな大学、地方の大学などでは、先生方の裁量の範囲が狭まってしまう恐れがあります。教育は人間を扱うのですから、先生方の個人的な教育の力量がかなり必要だと思いますけれども。

大学教員のエンカレッジメント

絹川　その点で大学セミナー・ハウスのFDというのは意義があり、あくまでも先生方の自主努力の活動なのです。しかしそれが規定化されますと、形骸化することは目に見えています。直さなければならない事柄があることは確かですが、それをコントロールするのではなく、エンカレッジするような政策の方がいいと思います。だから、文部省は、FDを努力義務として設置基準で規定化するのではなく、むしろ大学セミナー・ハウスのFDを助成するなど、間接的な方法でエンカレッジする政策をとった方が実効があるのではないかと思います。

佐野　そうですね。ここのFDプログラムや教懇などに参加された先生方はそれこそ生きる力を身につけて帰っていかれて、大学では核になってFD環境を造っていかれるわけです。そういう形が一番望ましいが、「歌を忘れたカナリア」には柳の鞭か象牙の舟か……。

絹川　そんなに私たちは怠け者なのですかと言いたい。そういう現象をわれわれが抱えていることは確かにありますが、その問題解決を規定に基づいた形で行なうということがいいことかどうか。もう一つは、大学の成績評価を標準化しようとしています。大学のクオリティ・コントロールをする前提には社会が大学のクオリティを評価する機能を持っていなければなりません。しかし、例えば就職試験では企業側は大学の教育活動そのものを評価して採用するわけではありませんね。現在は大学もクオリティ・コントロールをやっていないし、社会もそれを評価するシステムにはなっていない。そういう状況の中で一方的に大学のクオリティ・コントロールだけをやれと言っていることには合点がいきません。大学の教育内容が社会にとって意味がないのなら、大学を公的に認めている意味は何なのかということになります。本来は人間の世界を豊かにし、人間に希望を与えるような内容があるからこそ大学教育は存在し得るのではないでしょうか。その辺の視点を大切にして、ただ大学の先生を責めないでほしいのです。

佐野　大学も多様化していますから、どのへんのところをサンプリングしているのか分かりませんが。

絹川　変な質問かもしれませんが、私ども大学の教員の質はそんなに悪いんですか。もし非常に悪いのであれば、底辺を上げるということは意味がありますね。

佐野　『文学部唯野教授』はどうしようもない先生とされているけれども、あの先生はなかなか勉強家で個性的ですから、ああいう先生に接した学生はよく育つと思います。

平野　一方、中には失敗もしないかわりに何もしないという先生もいて、それでも生きていける環境を大学は持っているのではないでしょうか。

絹川　蟻の世界では70％は働くけれど、あとの30％は絶対に働かないのだそうです。働く蟻だけを取り出しても、やっぱりまたその中の70％だけが働いて残りの30％は働かなくなるそうです。どこの世界にもこれは困るという方はいるわけですよね。全員を働かせるということは本来不可能なのでしょうか。

佐野　大学というところは企業と違って三次元的な職場で、教育、研究という一つのラインしかないわけです。大学の悩みは他の職種に異動させることができないことでしょう。

絹川　そういう先生もお助けして、大学の役割を全うしなければならない。そこでFDが問題になるわけですね。アメリカのバークレーなどではそういう機関が教員に呼びかけて、レポートの採点の仕方についての講習会を開いたり、問題指摘をされた先生が、どうすればいいかを相談できるカウンセリングのような窓口を設けたりしています。日本で一つの大学ごとにそういう支援システムを持つのは難しいでしょうが、大学セミナー・ハウスのFDは、先生方が大学から命令されたとしても、自分の問題を抱えてきて、そこでお互いの問題を話し合っているうちに何かヒントが出てくるかもしれないという、非常に緩やかな教員資質開発システムを作っているわけで、このようなあり方が理想的かもしれません。それが、たとえば設置基準という一元的な形で行なわれるとどういう問題が起こってくるか、心配ですね。

あと、具体的な問題ですが、学部についてはこれまでと違った問題提起をしておきながら、大学院の方は高度専門的能力の人材の養成という新しい視点を入れて大学院の特化を図ろうとしていますが、ここで学部と大学院の構造的な関係が見えてこない。極端かもしれませんが、学部の教育を諦めてしまったという感じがして、日本の高等教育の焦点は結局大学院にシフトしているんだという印象を受けます。小、中、高で基礎的な知力の養成をし、大学で新しい展開をさせるわけですから、その学部教育をなおざりにして、大学院だけ特化するということは不可能なことだと思います。

大学院の重点化

佐野　これは亡くなられた前館長の岡先生も心理学者として仰っていたことですが、それぞれの発達段階で最適の学習があるはずで、いたずらに後にまわしたらいいということではない。

絹川　学部がそれこそレジャーランドになってしまっては、公的資金を投入する対象としても無駄になってしまいますからね。穿ちすぎかもしれませんが、経済面での焦りが現れているのだと思われます。学部教育の実質が専門から離れてユニバーサル化し、教養的なものでお茶を濁さざるを得ないため、産業の基盤を担う人材育成が大学院にシフトしたのではないでしょうか。

佐野　これはいわゆる理系はともかくとして、平野先生の分野ではどうでしょう。

平野　大学院については、今年の3月まで私がいた東大のことしか分からないのですが、人文社会科学の方が自然科学より学部と大学院の継続性があり、大学院に行ったらめざましく専門化するということはそれほどありません。それから、有馬先生は自然科学の大学院生を増やすことが将来の日本の行方を決めるのだというようなことを国大協時代から仰っていましたが、大学院入試をしてみると、全体的な質の歩留まりがあって、合格の基準を下げてまでも増やせばいいというものではないのではないかと思えます。高度専門職業人の養成コースを大学院に導入したのは、絹川先生が仰るように財界のつよい期待ではないかと思います。今後は研究者養成と高度専門職業人養成を大学院の担当教員がどのように扱うかという問題が生じてくると思います。

絹川　構造的には学部段階のユニバーサル化が大学院の段階に移ってきたという形になりますね。それにともなって大学院の機能を研究者養成から広げて、高度専門職業人の養成と言っているようですね。本来、そういう基本的人材というのは学部教育の課題だったのが、それができなくなったから、大学院の方に順送りにした。大学院とはそういうものだという新しい大学院のあり方ができるならそれはそれで良いとは思うのですが、先ほどの社会資本の投資の仕方という観点からは、随分無駄な感じがします。順送りしているわけですから、大学院で基礎教育をしなければいけないということは、高度専門職業人の養成の内容は基礎教育だということです。

佐野　小学校の学習は中学校に一部回し、中学校は高等学校に回し、高等学校は選択制になってさらに大学で高等学校的なことをやらざるをえない。だから大学卒ではレベルは保てないから大学院が必要だということですか。幸い人間長生きになりましたからね（笑い）。

絹川　答申には、国立大学は大学院の規模を拡大して重点化し、学部は縮小するとはっきり出ています。極端に言えば国立大学は皆大学院大学、私立大学は皆教養大学だという決め付けをされているような印象があります。その政策が国レベル、世界レベルでいいのかどうか、専門家が相当検討する必要がありますね。

大学と社会のよりよい関係

平野　先日の教懇で、参加の先生が、日本の大学と欧米の優秀な大学との違いの一つは、欧米の大学ではノーベル賞を貰った理系の先生が学部の1年生を手取り足取り教えたり、試験をしたり、一人一人の面接をしたりするが、それが日本には全くないことだと言っておられました。

佐野　アメリカは、教育への情熱と義務感が日本とは違います。この答申の中にもありますが、日本の大学の先生方は研究に傾いています。初等、中等教育への関心が薄いことでも分かるように、研究の力を教育に発揮するという実践の感覚が少ない。今回の答申には、高校教育への関心を重視しているのは評価してよいでしょう。

絹川　どうしてアメリカでは大先生が悠々と学部学生を相手に授業ができるのかというと、先生自身のゆとりがあり、突き詰めると財政の問題でしょう。無責任な言い方かもしれませんが、日本の大学があまりにも貧乏であることが問題なのです。教育の貧困です。

平野　各資源配分機関という耳慣れない言葉が出てきますが、これは大蔵省や文部省のことでしょうか、適切な資源配分を行なう必要があると言っていますね。

絹川　適切な資源配分は評価に基づいて行なうという形ですから、相当な危険性をはらんでいます。

先ほどから、佐野先生が教育・研究と仰っていますが、実は日本の大学は研究文化なのです。その研究文化の偏りを指摘している点ではこの答申も意味を持っているかもしれませんが、研究文化から教育文化への移行の契機としてはまだまだ弱いものです。そこで、教育の復活には教育を評価せよという意見がよく出されるのですが、それはクオリティ・コントロールに繋がるだけで、結局は教員を縛ることになります。この答申の中には、アメリカの大学のようにゆとりを持ち、広やかに教育に関与していくことのできる状況を作るような提言はほとんど見当たりません。われわれ大学教員にもいろいろ問題はありますが、大学教員をエンカレッジするような政策を提案するという方向をとってもらいたいと思いますね。

平野　アメリカのバークレーなどに行ってみると、秘書もいるし、図書館も充実している。あの厚みは本当にうらやましく思います。

絹川　大学の環境、特に日本の国立大学は、新キャンパスを作ったときは綺麗ですが、日常的なケアはほとんどできていなくてどんどん汚くなっていく。欧米の大学の生活空間は気持ちいいですね。そういうところにお金が出せない惨めさというのが問題だと思います。結局は貧乏たらしくなってきて目先のことだけに追われてしまうということになってしまいます。

平野　それに、日本の大学教員は社会から本当に尊敬をされていない。だから叩かれるのでしょうね。

絹川　社会に評価させないわれわれにも責任がありますね。大学というのはそんなものだということで、企業は「先生方は学生を悪くならないようにして送り出して下さい。後の教育は企業でいたします」ということがまかり通っていたわけです。ところが、それでは間に合わなくなってきて企業も困っている。今後は、企業側も大学のいいところを評価し育てていくという方向でいろいろな提言をするし、大学側も教育の実績を社会に評価してもらい、いい教育への努力をするというような状況を作っていくべきでしょうね。教育は百年の大計と言いますから、やはりゆったりとしていかないと将来に禍根を残すことになります。ただ、それに甘えてはいけませんが。

佐野　甘えているんじゃないかと思われないような適正な評価や情報発信も必要なわけですね。

絹川　一方的に非難するだけではなく、大学審の問題提起は問題提起として私どもも真剣にそれに対応する姿勢が必要です。

平野　教懇に参加する大学教員は、大学審の答申に大学教員の「立場から」何にでも反対して、現状を死守しようなどとは思っていません。現場で日々苦労し、よくしようと格闘していますから、社会の人々と一緒に大学をよくしようとしているのです。しかし、教育の問題というのは難しいですね。

佐野　それは、やはり教育は人間を扱うわけですから。人間を扱う以上、忍耐も必要でしょう。

絹川　そうですね。忍耐は愛です。

佐野　先生方、なおお話の尽きないところですが、予定の時間もかなり過ぎました。本日は長時間有益なご意見を戴き有り難うございました。今後とも忍耐と愛でもって教懇やFDはじめセミナー・ハウスの教育活動の推進に御支援戴くようお願い致します。

教育プログラム報告

第35回大学教員懇談会

98年7月4日〜7月5日

混迷する社会の中の教育と大学
―大学の役割―

▼講演

中等教育と大学

東京都立大学総長　山住正己

▼パネル

一．学校崩壊の中の大学のゆくえ

早稲田大学教育学部教授　下村哲夫

二．日米の大学比較

―日本は何を改革すべきか―

静岡県立大学国際関係学部教授　大礒正美

三．学生相談室から見る現代社会と教育

東京都立大学学生相談室教授　岡　昌之

四．大学審議会が見た大学

多摩大学経営情報学部教授　山岸駿介

【運営委員】

千葉大学理学部助教授　秀島武敏

神奈川大学外国語学部教授　松山正男

電気通信大学電気通信学部教授　梶谷　誠

東京学芸大学教育学部教授　並河一道

武蔵工業大学工学部教授　安田忠郎

【企画委員長】

早稲田大学政治経済学部教授　平野健一郎

〔参加状況〕75名53校

日本（5）、武蔵工業（4）、芝浦工業・東海（各3）、電気通信・目白・聖徳・大妻女子・東京電機・早稲田・大阪国際（各2）、筑波・東京農工・東京工業・東京商船・お茶の水女子・宮城・東京都立科学技術・酪農学園・足利工業・明海・東京歯科・青山学院・亜細亜・桜美林・共立女子・工学院・駒沢・創価・大東文化・多摩美術・東京工芸・東京純心女子・東京理科・日本女子・麻布・神奈川・神奈川工科・東洋英和女学院・金沢工業・中部学院・大同工業・名古屋学院・阪南・兵庫医科・ノートルダム清心女子・広島経済・福岡工業・沖縄国際・和洋女子短期・共立女子短期（各1）、防衛大学校（2）、大学コンソーシアム京都（1）、ベネッセ（2）、朝日新聞社（1）

◆

混迷している日本の社会のなかで、教育も戦後最大の危機的状況にある。今回の懇談会は、このような認識をともにする大学教員によって企画・運営され、これに呼応して全国から75名が参集して行なわれた。

大学は、カリキュラムや組織を改変してきた。しかし、その結果、中等教育との連携を取らなければ、大学教育の成立が危ういことがはっきりしてきた。それは、ひいては研究能力を低下させることになり、大学そのものの成立の危機となる。この危機に際して、大学教員・大学はどう対処するべきか。講演やパネルでは、この問題について、多様な論点が提示された。

講演で、山住正己氏は、知性豊かな人間を育てるという教育の基本的視点から、現在の学校教育にある根本的な問題点を近代教育史から掘り下げて指摘した。その上で大学の教育のためには、初等・中等教育において自由な学習が重要であること、それを実現するために、大学人が現行の初等・中等教育について考察し、積極的に問題や対策を提起するべきであることなどが説かれた。また，大学院の現状について、大学が真剣に取り組む問題として、強い懸念を述べた。

パネルでは、下村哲夫氏から学校経営について、初等・中等教育の混迷を紹介した上で、少子化と社会の動向、学校経営の面から、ユニバーサル化する多くの大学は、専門学校化かカルチャーセンター化の道を進まざるを得ないという議論を提起した。大礒正美氏からは、アメリカをモデルにして、日本の大学における教養教育の不徹底、大学システムの脆弱さの指摘があった。国立大学の学生定員割れは、教員数の削減となる。社会の多様なニーズに応えることになれば、総合大学は存在理由を問われることになるという問題提起もされた。

岡昌之氏からは、学生一人ひとりの対話がよい効果を教育に及ぼすこと、甘やかすことなく学生に手を貸すこと、学生に対して正直であることが教員に求められることなどが、学生相談室における体験を紹介しながら論じられた。山岸駿介氏からは大学審議会の中間まとめの提言とその施策について、批判的に分析し矛盾など問題点を衝く提言があった。山岸氏は、少子化と生涯学習社会の建設のはざまで、多くの国公私立に対して、大綱化つまり規制緩和と逆行する政策が行なわれる可能性についても指摘した。

紙幅が限られており、参加教員の討論については割愛する。詳しくは『第35回大学教員懇談会記録』をご覧いただきたい。

◆

懇談会に参加して「考えた事」

東京工芸大学芸術学部教授　川田淳一郎

私は企業にエンジニアとして38年間つとめ、めでたくも定年を迎えました。縁あって現在の大学に就職しましたが、今回のセミナーに参加させていただき、いかに大学の先生方が大学の進歩、発展に苦労しているかがつぶさに分かりました。ところが、苦労の割にあまり改善の兆候のないこともわかりました。ついには、中学、高校、大学の未来は明るくなく、大学はレジャーランド化のはてに「崩壊」するであろう……という恐ろしい予言がなされていることも知りました。この原因としては5〜6項目挙げられていますが、「いずれも本当だ」と思えることばかりです。しかし、ここで私のように企業から教育界に入った者からみると必ずしもそうとは思えないことなのです。

講師の先生を囲んで、夜中まで熱心に討論している中で、しばしば出てくる「今の学生は白けている」「大学をレジャーランド化し

ている」「大学は未完成品学生を社会に送り出している」ということは、いずれも本当だと思います。しかし我々は企業でそのような人たちに再教育をして、ひとかどの人間に仕上げているのです。しかも立派に社会の責任を果たしているのです。大学で4年間かけているのに、企業では3年間で一人前に仕上げているのです。彼らは3年間の教育ですっかり人相まで変わるのです。この違いを見過ごしてはいけないと思います。

企業の教育では、人間教育を重視します。「大学教育は知識の切り売り」が主なことのような感じがしてなりません。私はある大学の先生（有名大学の大学院哲学科博士課程修了）にこのことを質問してみたところ、「人間教育、人格教育などだれがするのですか、そんなことのできる人格者がどこにいるのですか」と言われ「成る程これが教育を荒廃させているのだな」と思いました。企業で何も聖人君子を作ろうとしているのではありません。「決まったことを、決まったように責任をもってできる人」を育てているのです。

四年制の大学を、勉強ができるというだけで、3年間で卒業させて何の役に立つのでしょう。企業の人間教育が4年かかるだけの話ではないでしょうか。「教」があって「育」のない大学は「崩壊」するでしょう。21世紀に向かって真の「教育」をすることによって、レジャーランドを学苑「アカデミー」に蘇生させようではありませんか、企業では事実それをやっているのですから。

大学教員懇談会からのアピール（要旨）

第35回大学教員懇談会参加者有志一同

一九六八年の紛争以来、日本の大学は社会経済の変化、学生の大衆化に対応する努力を積み重ねてきた。最近10年間は、大学教員懇談会でも大学の魅力開発、授業改善、「大綱化」、カリキュラム改革、「任期制」などを取り上げてきたが、日本社会の未曾有の構造的変化は進学率40％を超えるという現象として大学に押し寄せてきた。大学の教職員は、社会の批判の中で、これらの問題に取り組むにつれて、その圧力の重さを強く感じるばかりであった。

ところが、今や日本社会は経済の崩壊、官僚の腐敗、政治の無力といった混迷の極にある。そして「荒れる中学校」の実態と小学校の「学級崩壊」の現象が顕わになり、大学だけが日本の教育の問題児ではないことが明らかになった。

この事態を前にして、今年の懇談会では、大学を社会の外において、大学を免罪しようとするのではなく、社会の中の教育、教育の中の大学という位置付けにおいて、大学問題を根本的に考え直そうとした。大学・大学人は被害者であるだけでなく、加害者でもある。たしかに、大学は自分たちの存在理由を自問することが少なかったことは否めない。とくに惰性的な「入試改善」を続けてきた大学が子供たちの生活、教育と社会全体のあり方に甚大な被害を与えつづけたことは最大の欠点であり、今やその報いを大学・大学人自身が受けているのである。

今、日本の大学を建て直したいと考える第35回大学教員懇談会参加者有志は、小学校から大学までをトータルに捉えて、教育の抜本的な再構築をすること、そして社会全体で社会の中の教育、教育の中の大学について根本的に再検討することを提唱する。大学入試は多様化、容易化されたままでよいのか。またレジャーランドと呼ばれ、就職までのモラトリアムの場であることが大学の望ましいサービスか。これらをあえて社会や家庭に問いたい。

世界的規模で人類の生存が問われる21世紀に際して、教育がそのかぎを握っているならば、トータルな教育システムが子供たちに幸福を与えるものになるには、大学はどうあるべきか。日本が「知識集約型社会」や「生涯教育社会」に移行するならば、そのときどのような大学が望ましいのか。このような問題の再検討は、文部省やその審議会、そして一部の論壇などの部分的な検討にまかせておくだけでは十分ではない。大学について、大学教職員は他の教育現場の人をはじめ広く社会の人びとともに、総合的かつ本質的な議論をする必要がある。社会全体で、これまでと違うスタイルで、これまでとは違う教育論議を行なうことを提唱する。

＊　＊　＊

アピール作成の趣旨

大学教員懇談会は、全国の大学の教員有志が八王子の大学セミナー・ハウスに集まって、大学をめぐるその時々の問題を話し合うという活動を過去35年間続けてきた。最近8年間は、去る4月29日に館長ご在職のままお亡くなりになられた岡宏子先生が，特に力を入れてこの会をご支持、ご指導くださった。先生のご逝去の直後に，予定通り開催された今回は、先生のご遺志を体して日本の大学をより良い教育の場とするためには、今日，日本の社会、日本の教育全体の中で大学を考えることが特に緊急であると考えて、大学教員懇談会としては初めて外に向かってアピールを行なうことにした。二日間の討論・討議の後、ほぼ全員の参加者で検討した結果、有志一同として、社会全体で教育問題、大学問題を話し合うことを提言したアピールは、おおよそ前述のとおりである。

大学教員懇談会企画委員長　平野健一郎

第16回大学教員研修プログラム

98年9月19日（土）～20日（日）

教える授業から学ぶ授業へ—その2—

▼講演

学習への動機づけ

日本女子大学学長　宮本美沙子

▼提題

法学教育の動機付けについて

中央大学法学部教授　山内惟介

「学び」の場を創る

東京学芸大学教育学部教授　小林志郎

相互性を生かす授業

—公開実験授業の経験から—

京都大学高等教育教授システム開発センター教授　田中毎実

かかわりを生み出す授業

—大学教師生活の経験と反省—

上智大学外国語学部教授　蝋山道雄

【参加状況】40校63名（除講師・運営委員）東海(5)、日本(4)、和歌山・広島国際・松山(各3)、帯広畜産・宮崎県立看護・恵泉女学園・上智・東京薬科・武蔵工業・敬和学園・大阪工業・大阪歯科・福岡工業・(各2)、東京外国語・佐賀医科・大妻女子・共立女子・芝浦工業・東京理科・日本女子・明星・立教・目白・東京歯科・北里・創価・神奈川工科・静岡産業・大同工業・名古屋外国語・日本福祉・関西・関西学院・園田学園女子・ノートルダム清心女子・産業医科・北海道女子短期(各1)、防衛大学校(1)

第16回大学教員研修プログラムは、「教える授業から学ぶ授業へ—その2—」をテーマに、40校63名の熱心な参加者と16名の講師・運営委員によって行なわれた。今回は講演と提題を中心に報告したい。講演では、宮本氏が心理学の立場から動機づけ一般に関する話をされた。氏は当日配布された資料の中で、「世間では、学習への動機づけときくと、張り切った努力家や勤勉な人を思い浮かべる。確かにそれも学習への動機づけのある人と言えよう。けれども私は、もう少し幅広く学習への動機づけをとらえたい。私は、意欲を発揮した結果学ぶ内容が分かるようになるのではなく、自分のかかわりにより知ることを実感し充実感が感じられることそのもの（生きがい）が、学習への動機づけなのだと思う」と述べている。そして、いかに学生の動機づけを支援するか、各教員の実践が問われていると指摘された。

提題では、宮本氏の話を受けて、山内惟介名惟氏が法学教育の動機づけについて、氏が実践されている授業を中心に話された。氏は現在所属している中央大学だけでなく、その他の大学での講師の経験を通じて、学生の意欲と能力に差がある以上、全ての学生に対して均一の授業はできないと判断した。したがって、少なくとも1割、できるなら上位3割の意欲と能力のある学生を対象に授業を展開することで、ひきしまった授業ができるという結論を出された。そして具体的には、①何をすべきかという学習プランを具体的を提示する。②枠組みにそって反復学習させる。③成功体験を持たせる。④成功体験を先輩から後輩へ伝承させるという結論を示された。氏が一番重視していることは国語力である。特に書く力に重点をおき、そのために判例や新聞記事などを教材として、その中にある論点を時間系列、社会の背景などを考慮して論理的にまとめ、文章化していく思考過程の訓練をレポートとして課し、添削して学生に返しているとの報告があった。

続いて小林氏は、教員養成系大学において、演劇教育の実践を通じて自身の「学びの場を創る」ことが大切であると話された。氏は、学生に演劇の創作経験を通じて達成感を経験させることにより学生に動機づけを行なっている。特に最近、コミュニケーションが苦手な受け身の学生が増えているため、演劇演習を通じて、コミュニケーションの理論を勉強し実践するよう心掛けておられる。そのキーワードとして、言葉を開き、体を開き、心を開くことが挙げられた。具体的な実践としては、ブラインド・ウォークなどの体を使ったエクササイズがＶＴＲで紹介された。また、1分間で4人以上の人と自己紹介を交わすエクササイズでは、学生がクラス内で知り合いを増やしていく過程で、言葉を開き、体を開き、心を開いていく様子が説明された。

次に田中氏は、自身の公開実験授業を通じての経験を報告された。氏は、自身の専門である教育学は現在自信喪失中であり、学問として互いに作っていかざるを得ない状況だからこそ相互性を生かす授業が重要であると述べられた。そして、相互性を生かすために使っている「何でも帳」について説明された。これは、授業後に講義に関して学生に感想を求め、教師がコメントを入れて返しているもので、学生から様々な意見が出て非常に面白いという。これによって氏は、学生に思考の流れがあり、授業によって学生の内面で何か複雑なものが動いていることに気づいたという。それを教師の側が拾い出し、授業に生かせれば、よい授業になるのではないかと述べられた。

最後に蝋山氏は、今年で最後になる29年間の大学教師生活を通じて考えてきたことを話された。氏はもともとは研究機関の研究者で、その後、大学教師になったという経歴がある。その時、「大学に移った以上は、研究者ではなく教師として生活しよう」と覚悟を決めたという。しかし、大学自体も、同僚の先生たちも授業について何も教えてくれない。したがって、自分が学生時代に体験した授業しか参考にするものがないことに戸惑ったという。ここにFDの重要性があると氏は指摘された。続いて、自身の直面した問題として、大教室授業について、教科書について、試験についてなど、多くの教師が悩んでいる日常的な問題について触れられた。また、海外の大学では、専門職員が資料を作ったり、参考図書を図書館に学生が必要な数だけそろえるなど、学生の学習環境を整えているのに対して、日本の大学では必ずしもできていないことも指摘された。

平成10年度 第2回常務理事会 98年8月21日／アイビーホール

【出席者（順不同）】（常務理事）三宅彰、宇野重昭、絹川正吉、小山宙丸（法人）佐野博敏理事長

●主な議事

専務理事の後任人事、他。

平成10年度 第93回理事会・第73回評議員会 98年9月12日／アイビーホール

【出席者】（理事）佐野博敏、中川秀恭、三宅彰、宇野重昭、絹川正吉、（評議員）川原栄峰、井早康正、岡本靖正、有山正孝、佐藤保、柳井道夫、志村尚子、日江井榮二郎

【委任状による者】理事13名、評議員45名

佐野理事長が議長となり、各議案について逐次提案説明があり、それぞれ質疑応答・審議の結果、いずれも原案通り承認された。

◇評議員人事について

協力会員校の学長交替に伴う千葉大学長磯野可一、武蔵工業大学長堀川清司、専修大学長出牛正芳各氏の評議員新任と右記大学前学長の丸山工作、古浜庄一、望月清司各氏の評議員退任。

一身上の都合による東京工業大学名誉教授内藤正、参議院議員・文部大臣有馬朗人両氏の評議員退任。専務理事の選任に伴う前都民カレッジ事務局長本江哲郎の評議員新任。財界関係者の交替に伴うさくら銀行常任顧問神谷健一氏の評議員新任と同名誉顧問小山五郎氏の評議員退任。

◇役員人事について

一身上の都合による参議院議員・文部大臣有馬朗人氏の理事退任。財界関係者の交替に伴うさくら銀行常任顧問神谷健一氏の理事新任と同名誉顧問小山五郎氏の理事退任。

専務理事の選任に伴う前都民カレッジ事務局長本江哲郎氏の理事新任。佐野理事長より岡宏子理事死亡（本年4月29日）以降欠員のままであった専務理事の後任人事について経過説明があり、去る8月21日の常務理事会で審議し、了承が得られている本江哲郎氏を専務理事として推挙したい旨提案があり、就任月日を10月1日とすることと併せて承認された。

平成10年度 第3回大学教員研修プログラム委員会 98年9月20日／大学セミナー・ハウス

【出席者】絹川正吉、小林志郎、井下理、佐々木一也、建部正義、中田良平、原一雄、福田一郎、宮腰賢、山内正平、蝋山道雄、丹羽泉、清水一彦

【ハウス側】佐野館長ほか企画室スタッフ2名

●主な議事

第16回大学教員研修プログラムについて、新版FDハンドブックについて、他。

平成10年度 協力会員校事務連絡会開かれる 98年9月18日（金）／11時～16時

この連絡会は開館翌年の第1回から数えて通算23回となる。今回はしばらく途絶えていたにもかかわらず、日頃会員校の窓口になっておられる学生課、庶務課等の職員の方々29名（26大学）の出席があった。

午前中は佐野理事長・館長の挨拶及びセミナー・ハウスの概要、本郷企画室長からは「教育プログラム」についての説明があった。午後は池田業務課長の施設説明と案内があり、続いて全体協議では、貴重なご意見やご要望をいただいた。セミナー・ハウスにでは今後、これに応えるよう努力していきたい。

（出席者）

久保田隆（一橋）、森沢淳一（東京工業）、松本由紀子（電気通信）、藤城健三（お茶の水女子）、横山芳文（筑波）、坂井保雪（千葉）、堀越幸雄（埼玉）、笠松裕彦（東京都立）、朝日敦、有場和憲（東京都立科学技術）、高徳信子、大澤祥子（日本女子）、田邊久夫（慶應義塾）、中島久美子（中央）、白濱哲郎（青山学院）、高田建夫（立教）、島田裕司（日本）、今野清文（明治学院）、青野裕亮（成蹊）、森川尚子（国際基督教）、富田金雄（東京経済）、佐藤善志、滝宏隆（学習院）、守谷香代美（芝浦工業）、政木純子（帝京）、稲毛通男（東京電機）、木村伸一（桜美林）、豊嶋信一（東京工科）、伊藤瑞枝（白梅学園短期）（敬称略）

専務理事就任のご挨拶

本江　哲郎

この十月から、専務理事に就任いたしました本江哲郎でございます。もとより、浅学菲才の身でありますが、佐野理事長ほか関係者の皆様のご指導の下に、大学セミナー・ハウスの更なる発展のため全力を尽くしたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

この度の就任のお話をいただき、早速ハウスに関する資料を読ませていただきました。そして、この施設が「静かな自然の環境の中で教授と学生との小グループが起居を共にし、思索し、討議し、談話を交え、人格的接触を図りながら密度の濃い人生経験を持とうとするのがその目的である」ということを知りました。今更申し上げるまでもありませんが、今日、家庭をはじめ学校・企業の中での人間関係がややもすれば、希薄で乾いたものになってきたと言われております。この現実を前にして当施設の果たす役割は、ますます重要視されなければならないと強く感じ、私の職責の重さを先ず認識させられた次第です。

一方、わが国は現在バブル崩壊以降の長引く不況の最中にあって、社会のあらゆる分野で構造的変化が急激に進んでおります。まだ就任間もない私ではありますが、ハウスの運営にもこの変化は多くの影響を与えていると実感いたしております。しかし、ハウス設立以来欠かすことなく毎年利用いただいている順天堂大学附属病院のセミナーのグループや老先生を囲んで今でも勉強会を毎年開催している社会人の方々等に接するたびに、私は感動を覚えざるを得ません。また、このキャンパスの到る処で成長している記念植樹を見ていると、この施設の理想の灯は決して消してはならないとの思いが胸に迫ってきます。

数多くの諸先輩方によって築かれた三十年を超える輝かしいハウスの歴史を各種資料により知るたび、私は身の引き締まる思いを強くいたしております。どうか諸先輩はじめ協力会員校また千人会の皆様方には引き続きご支援ご協力のほど心からお願いいたします。

本江哲郎氏略歴　昭和6年生まれ。同29年宇都宮大学農学部農業経済学科卒、東京都職員に。東京都美術館長、東京都立大学事務局次長、（財）都民カレッジ常務理事兼事務局長などを歴任。平成8年9月以降は三井海上火災保険（株）顧問を務め、同10年8月退職。

千人会

98年7月～9月

◆ご入会ありがとうございました

◇玉木彰殿・産能大学助教授／A

▼会員数＝一、三九三名

◆会費ありがとうございました

臼井久和、太田正孝、辻達也、常行敏夫、長浜洋一、三橋文雄、讃岐和家、永井裕、入江和生、山代昌希、黒田道雄、吉松藤子、山口桂子、内山尚三、水谷眞智子、中村哲哉、石井進、中村浩三、松島恵、簗田長世、山西貞、橋谷卓成、弦田実、金谷憲、柏木恵子、綿引二郎、林ひろみ、高木健太郎、松尾秀雄、川添利幸、谷口雅男、高橋勇悦、田島恵児、小池滋、厚東偉介、橋本智、藤平重雄、古関彰一、窪田富男、宮本瑞夫、三和治、藤原鎮男、色川大吉、武者利光、芥川龍男、古本捷治、吉田美穂子、米村貞蔵、品川孝次、橋本研一、梅沢豊、山口重克、石黒哲郎、小池生夫、大熊徹、千羽喜代子、原誠、小倉充夫、十代田知三、鈴木成文、三宅彰、小川信子、川原啓美、慶谷伸代、稲田拓、桐澤潔、五十嵐武士、荒川由美子、柴田誠、仙田哲、中山光雄、瀬田裕司、伊藤小百合、原島幸太郎、森川八洲男、田村恭、井上孝、浅井邦二、大瀧祐子、伊藤一郎、志賀英、伊東一江、佐藤東洋士、佐藤豪、中島文夫、新井勝紘、市川博、関田寛雄、大野澄子、山本武彦、鶴野省三、半谷高久、原田行男、八幡義博、松瀬貢規、岡村文子、滝幸三郎、長内了、下田弘、福島正久、宮野三郎、荻原洋太郎、沖塩荘一郎、村田光二、田中弥寿雄、井上信子、船山信子、石橋秀雄、増田茂樹、小林祐子、野崎昭弘、木村宗男、鈴木一道、林勲、村上陽一郎、朽津耕三、國岡昭夫、岩崎不二子、古屋野正伍、小堀桂一郎、松岡紀雄、出居茂、石村善助、並河一道、楢林博太郎、米山弘、大澤綱一郎、吉田光孝、田中栄、田端光美、吉原健吾、牧野誠一、松田徳一郎、谷俊治、麓信義、岩崎征人、大東百合子、高村多賀子、布施濤雄、尾形憲、鈴木俊和、飯田経夫、関本昌秀、関口利男、山田耕司、高橋公雄、岡野澄、松田武彦、岡沢憲芙、井手久登、朝倉孝吉、横山宏（敬称略）

◆千人会員のおたよりから

●健康で誕生日を迎えられましたことに感謝して千人会費をお送りさせて戴きます。大学セミナー・ハウスの益々のご充実をお祈り致します。

（東京学芸大学名誉教授・洋画家・三橋文雄）

●大学名称が八千代国際大学から秀明大学へと変更になりました。

（山口桂子）

●健康で古稀を迎えられましたことを記念して、今回は増額します。

（簗田長世）

●合宿オリエンテーションではお世話になりました。厚く御礼申し上げます。貴ハウスのますますのご発展をお祈り申し上げます。

（東京農工大学教授・橋谷卓成）

●セミナー・ハウスにはいつも人々が溢れて盛況の様子。大学の垣根を越え、かつ大学の延長として、学問の場として定着しているように思えます。貴重な存在としてサポートしてゆきます。

（名城大学教授・松尾秀雄）

●御丁寧なカード御恵送ありがとうございます。セミナー・ハウスのますますの御発展を祈ります。

（早稲田大学教授・厚東偉介）

●岡先生のお別れ会には出席できずたいへん残念です。ハウスのますますの発展をお祈りいたします。（大東文化大学教授・窪田富男）

●暑中御見舞い申上げます。誕生カード有難く頂きました。消光の状況乍ら平安を有難く思います。セミナー・ハウスの一層の発展を祈ります。

（神奈川大学教授・藤原鎮男）

●岡先生が亡くなられてから、急速にセミナー・ハウスが遠くなってゆく感じがしています。

（東京経済大学名誉教授・色川大吉）

●お誕生日カードありがとうございました。千人会のメンバーに入れていただいて20余年、大学セミナー・ハウスで学んだこと教えられたことが多くありました。その中で岡先生はあこがれの先生でした。7月5日の追悼記念会では感謝の念を一層深めました。私も「生きているうちは活きて」と人生を過ごしたいと存じております。

（青葉学園短期大学教授・吉田美穂子）

●昨年までは岡先生の一筆がありましたのを思い出し、なつかしさと温かさを感じました。皆様の御健康を祈念申し上げます。

（芥川龍男）

●都立大学のキャンパスから大学セミナー・ハウスが望見できる事に気付きました。ご発展をいのります。

（橋本研一）

●セミナー・ハウスの森がなつかしい季節となりました。皆々様には御変わりなく御活躍の事と存じます。私事3月に43年間通いました女子大は定年退職いたしまして名誉教授の称号をいただきました。皆様方の御支援と感謝しております。4月から北海道女子大学に勤務、東京と札幌通いの日々です。

（小川信子）

●セミナー・ハウスにとって大切な岡先生も昇天されました。とても寂しく存じますが、それに引き換え、セミナー・ハウスの樹の茂りの何と豊かなこと！改めて先生が何時迄も見守って下さっていることを深く感じました。新しい佐野先生のもとにますます緑濃き思索の森の御発展を！

（大滝祐子）

●セミナー・ハウスにもご無沙汰しておりますが、今年もおかげ様で元気に誕生日を迎えることができました。

（早稲田大学名誉教授・浅井邦二）

●御祝いのカード有難うございました。健康で80歳を迎えることが出来たことを有難く思います。岡先生には同年齢でしたので一度おめにかかりたいと思って居りましたので誠に

残念でございます。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。（伊東一江）

●岡先生のご他界残念でした。心からご冥福をお祈り申し上げます。私は年なりに元気に日々を過ごしております。（志賀英）

●バースデー・カードを送って下さりありがとうございました。昨年3月で青学大を定年退職いたしました。（関田寛雄）

●ご発展をお祈りいたします。時代の大きな転換期にあたり、学会・大学等で（年齢的には）指導的地位にあるものと責任を感じています。（横浜国立大学教授・市川博）

●20代の学生の頃利用して以来、30余年の歳月が経ちました。原点にもどってまた利用したいと思います。（国立歴史民俗博物館教授・新井勝紘）

●お陰様で元気に満68歳の誕生日を迎えることが出来ました。毎月一回、母校の都立大工学部の材力系の分野のゼミナールに出席し、良い刺激を受けています。（宮野三郎）

●今夏は私の大学（上野学園大学）の学生たちが利用させて頂きました。ありがとうございました。（船山信子）

●何もできずに申し訳ありませんが、この送金ぐらいは何とか続けさせて頂きます。（大妻女子大学教授・野崎昭弘）

●本年3月退職してこの9月で82歳となります。千人会はつづけるつもりです。（古屋野正伍）

●内外ともに不気味な出来事がつづいています。われわれが20世紀の間に遭遇したにがい体験を二度とくりかえすことのない平和な21世紀を迎えたいものです。（専修大学教授・石村善助）

●誕生日メッセージを有り難うございました。海外出張等忙しくしておりましたので、会費納入が遅れましたことをお詫び申し上げます。（玉川大学教授・米山弘）

●ごぶさたしております。これまでは学業、仕事が熱中する対象でしたが、30歳なったのを機に、今後は仕事はとりあえずの生活の糧として、一生を通じて育てていけるもの、熱中できるものを探したいと思います。また、面白いセミナーがあったら出席しますので是非声をかけて下さい。（外務省人権難民課・吉原健吾）

●9月15日に68歳の誕生日を迎えました。幸い、健康に恵まれコロニー嵐山郷で非常勤医師として、白梅学園短期大学で非常勤講師として仕事を続けています。自由な時間が増えテニスや卓球を楽しむことができるようになりました。セミナー・ハウスを利用させていただいたことなどいろいろと思い出しております。（谷俊治）

●会費をお送りいたします。本年65歳になりますが元気で日本大学に勤務しています。（松田徳一郎）

●岡宏子先生を偲ぶ会には所要のため出席できず残念でございました。大学も難しい時代になり年々仕事がふえました上に、現在の本務校が地理的に八王子とは都の反対側であるため、とかく御無沙汰で申し訳ありません。（明海大学学長・大東百合子）

●70歳になったので、身辺を整理し、「外国人一一九ネットワーク」の事務局長としてオーバーステイ（一般には不法就労者）の人々の人権のためにお手伝いしてます。（埼玉YMCA国際奉仕委員・布施涛雄）

●岡宏子先生のご冥福を御祈り致しております。（東京大学名誉教授・井手久登）

ご生前のご厚情に感謝し謹んでご冥福をお祈りいたします

藤井耕一氏（明治大学名誉教授、97年6月26日没。86歳）第3回大学共同セミナー「科学と宗教」の運営委員を務め、後に大学教員懇談会にも参加された。68年以来29年間の千人会員。

伊藤清和氏（元日本大学教授、97年11月1日没。80歳）80年代に大学教員懇談会に2回参加し、以後学生との合宿で利用された。83年以来の千人会員。

佐藤進氏（元東京大学、新潟大学、武蔵大学、日本大学教授、自治省地方財政審議会会長、98年3月1日没。72歳）70年代後半にゼミ合宿等で来泊、以後21年間の千人会員。

大河内繁男氏（上智大学教授、98年5月9日没。56歳）75年以来の千人会員。91年には大学教員懇談会にも参加された。

寄贈図書

98年7月～9月

『注釈　遠野物語』
遠野市立図書館代表　糠森富士雄殿

『ビジネス英和辞典』　『ミャンマー現代短編集2』
築田長世殿

大同生命国債文化基金殿

寄付

98年7月～9月

〈一般寄付〉

一〇、〇〇〇円
＝日本女子大学教授 高橋たまき殿

一〇、〇〇〇円
＝大久保無教会 泉 治典殿

一〇、〇〇〇円
＝東京理科大学大澤ゼミナールOB殿

〈現物〉

ベニヤ板 大小80枚＝社団法人 日本建築家協会関東甲信越支部殿

業／務／通／信

セミナー・ハウスの繁忙期も終わり、一息ついているところだが、深刻な経済不況を反映して、昨年以上に利用者が少ない。第2・四半期の延べ利用者数は一〇、四一三（昨年一一、四九五）人で、昨年と比較してほぼ九・四％の減少となった。団体別でみると、企業社会人団体と非会員校が微増だったが、会員校は一四％、学術・教育団体は四七％の大幅減少となった。月別でみると、昨年同期と比較して七月は例年並であったが、八月は五％、九月は、長年利用していた社会人団体が利用しなくなったことが直接の原因となって二四％の減少となった。▼「60年安保」をテーマに実施する社会調査の事前準備をするための合宿でご利用下さった**早稲田大学文学部教授**・那須壽ゼミの中原敬太さんにゼミのご紹介をお願いした。▼ユング心理学を中心に大学共同セミナー四回、大学院共同セミナー一回を企画された故小川捷之先生（上智大学教授）が将来のカウンセラーを志す大学院生のためのプログラムを開催したいとの構想から始まった**大学院生心理臨床研究集会**も今回で五回を迎えている。そこで広島大学教育学部教授・一丸藤太郎先生にあらためてこの研究集会の活動についてご紹介いただいた。▼今号から「ひとこと」コラムが登場します。まずは職員のご紹介からはじめていきます。

わたしたちの合宿①

報告書作成への大きな第一歩に

早稲田大学第一文学部哲学科社会学専修3年
中原　敬太

早稲田大学第一文学部哲学科社会学専修には3年次に調査実習のゼミがあり、毎年1冊の報告書を作成してこのゼミは終わります。私たち那須ゼミは那須壽教授と大学院生の矢部さん、そして学生20名で毎週金曜日に集まっています。その那須ゼミのテーマは「60年安保」。70年後半生まれの私たち学生にとっては、はっきりいってピンとこないテーマに戸惑いを隠せぬまま、那須ゼミは4月にスタートしました。

まずは各々が60年安保に関する文献を読み、それを報告することから始めました。そうすることによって少しずつ「60年安保」の像を捉えることができるようになりました。那須ゼミで「60年安保」を扱うのは3年目のこと。一昨年はひたすら当時の新聞や月刊誌、週刊誌などの資料を読みあさり、昨年はアンケートによる調査。その2年間の調査を受け、私たちはインタビューを通して「60年安保」に取り組むことになりました。

今回の合宿の目的はインタビューの質問項目の設定です。合宿前にそれぞれが考えたインタビュー項目を報告し、ディスカッションをする。最初は沈黙することが多かった私たちも、先生の「無知をさらけだせ」のひとことで、一気に距離が縮まり、熱く語り合うことができました。通常の授業では、どうしても時間が限られ、話し合いがちょうど盛り上がったころに、打ち切らなければならないこともしばしばでした。しかし、今回は十分な時間が、しかも、まとめて取ることができ、充実した討論になりました。

夜中まで盛り上がった議論をとおして、インタビューの内容を詰めることができたのはもちろんのこと、「この20人で一冊の報告書を完成させるんだ」という気持ちが高まったことも、今回のこの大学セミナー・ハウスでの合宿の最も大きな収穫のひとつであったと思います。この合宿が報告書作成への大きな一歩となったことは間違いありません。今後は、検討した質問項目をもとに、9月から10月にかけて実際にインタビューを行ないます。

ゼミ生全員にとってこのようなきちんとした形でのインタビューは初めてのことだけに、「聞きたいことを聞けるだろうか、うまく話を膨らませることができるだろうか」と不安は絶えませんが、この機会を生かし、良い経験にしたいと思います。インタビューをすることなど、今後そうあるものではないのですから。インタビューが終われば、それをもとに報告書の作成にとりかかることになります。そのころ、またこの緑に囲まれた静かな環境で合宿を行ないたいと思います。

充実した討論を通して気持ちを高めることができたという那須壽（写真中央）先生とゼミの学生たち―― 本館入り口にて

わたしたちの合宿②

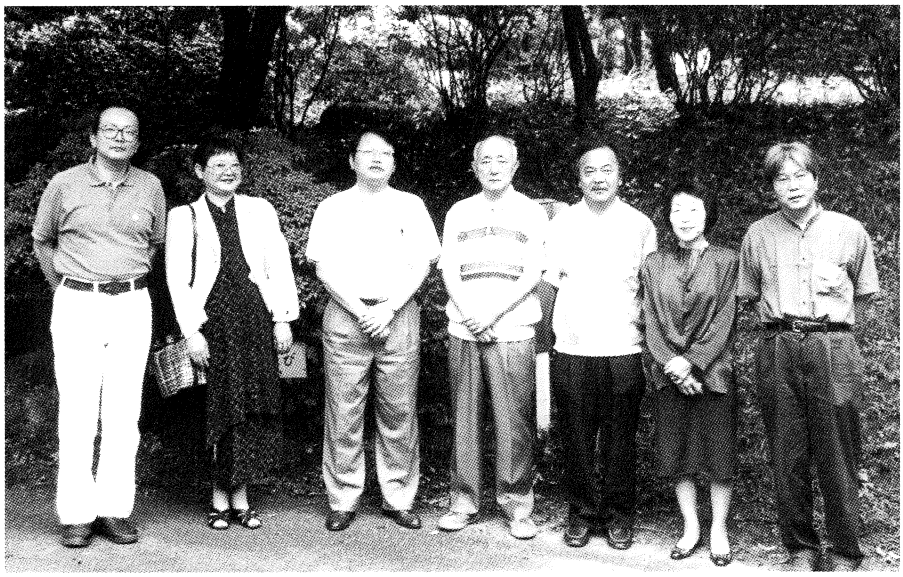
「心の専門家」の養成の第一歩として

―「大学院生心理臨床研究集会」を終えて―

広島大学教育学部教授　一丸藤太郎

去る九月四日(金)～六日(日)の三日間にわたり、日本心理臨床学会の主催により「第5回・大学院生心理臨床研究集会」が開かれた。

参加者は、主に博士課程前期で心理臨床を学んでいる124名であり、北は北海道大学から南は熊本大学までと全国各地の国立・公立・私立の45大学院からの参加であった。講師は、学会理事長の鑪幹八郎氏と教育・研修委員の七名があたり、実りある有意義な研究集会であった。



研究集会を企画運営された日本心理臨床学会の教育・研究委員会の方々。右から三人目が一丸藤太郎先生 ―― 出合いの丘にて

第一日目は、オリエンテーションの後、鑪幹八郎理事長により『臨床心理学への招待』というテーマで心理臨床を学ぶ初心者のための講演が行なわれた。心理臨床を学び始めた院生に対して、心理臨床家としての社会的役割、倫理、学ぶ道筋などが理事長自身の体験に基づいて具体的に講義された。参加者からの質問も活発であり、学ぶ者の熱意が感じられるものであった。夜には「懇親会」が行なわれ、参加者同士だけでなく講師もまた相互に個人的に知り合うことができた。

第二日目は、参加者は三つのグループに分かれ、各グループはそれぞれに「事例研究」、「心理学的アセスメント」、「体験学習」の三つのセッションに参加した。同じ事例、同じ心理検査の結果について、教育・研修委員を中心にして討議やカウンセリングについて体験的学習を行なった。またその間に「フリー・ディスカッション」の時間が設けられ、「心理臨床家として成長するためには、どのような訓練が必要か」、「心理臨床家には、どのようなパーソナリティの人が適しているか」といったことから、講師に対して「なぜ、心理臨床家になったのか」といったことまで、インフォーマルな集会でないと尋ねられないような疑問について話し合うことができた。全てのセッションが終わったのは、既に十時を過ぎていた。講師も参加者も疲れ果てていたが、あちこちでグループになり、遅くまで談笑が続いていた。

第三日目は、これまでの研究集会での成果や疑問について全体討議が行なわれた。研究集会で学んだこと、疑問などが報告された。

本研究集会のように多くの大学院から院生が集まることは、おそらく他にあまりないのではないだろうか。院生はお互いに、自分たちが何をどのように学んでいるのかといったことについて情報を交換することにより、自分自身の考え方や受けている訓練の特徴を明らかにすることができたのではないかと思う。急激な社会の変動やストレスに満ちた日常生活から「心の専門家」に対する社会からの要請はますます高まっており、本研究集会も「心の専門家」としての心理臨床家の養成の第一歩として有意義な集まりとなった。

ひとこと

♪今は～もう秋～♪。今年もセミナー・ハウスのぎんなんはおいしいかな…と、ここで3年目の秋を迎える私は、欲張りにもこんなことを想像してしまいます。私は、本館の1階で電話予約や来館された方々のご案内などを担当しています。仕事の合間に、ふと窓から外を見ると、今は紅く色づいた木々が、ホッと一息つかせてくれます。いまではどこの大学でも、立派な自前の研修施設をお持ちのことと思います。でもこんなに近くに、勉強するにはもってこいの、とても静かな環境があることもぜひ知ってください。まずは散歩がてらセミナー・ハウスの「秋」を満喫してみられてはいかがでしょうか。お待ちしています。

（金子恵・業務課／予約・受入れ担当）

利用状況

98年7月～9月
＊＝同月2回利用
日帰りを除く

■7月（59グループ、延二、一五〇人）

国際基督教大学教授　R・H・シュレーシャー
明治大学講師　宮崎　豊
筑波大学助教授　嶋田　純
早稲田大学教授　那須　壽
立教大学教授　小西　正捷
立教大学教授　庄司　洋子
東京農工大学助教授　直井　勝彦
千葉大学教授　菅原　憲二
明治学院大学教授　平島　成望
学習院大学教授　砂田　一郎
早稲田大学教授　木村　建一
東京女子大学助教授　中村　眞人
東京工業大学教授　米崎　直樹
日本大学教授　長谷川啓之
慶應義塾大学学生相談室
東京理科大学教授　狩野　紀昭
立教大学教授　豊田由貴夫
日本女子大学講師　坂田　仰
東京工業高等専門学校黒崎・落合・吉原ゼミ
明治大学教授　播　里枝
東海大学助教授　面谷　信
東京経済大学教授　竹前　栄治
東京会計専門学校就職合宿
上野学園大学教授　内野　允子
創価大学教授　越智　昇
晃華学園中学・高等学校英語部
福井工業大学教授　芳野　赳夫
埼玉県立朝霞高等学校＊
目黒星美学園小学校教員研修
流通経済大学教授　大塚　祚保
千葉県立京葉高等学校
江戸川大学講師　平山　満紀
山梨学院大学講師　小山　嚴也
千葉県立柏井高等学校
早稲田大学・ペンシルバニア大学スケッチワークショップ
第35回大学教員懇談会
首都圏ファンタジーグループ研究会
糖質研究若手の会
賢治の学校
日本建築家協会
高橋聖書集会ヨシュア会
キリスト友会日本年会
文学教育研究者集団
宮代会カウンセリング勉強会
環境管理センター＊／東芝エンジニアリング／アイワールド／三菱重工業相模原製作所／東京警察病院／佼成出版社＊／ワイエイシイ／ローヤル電機／オリンパス光学工業

〈個人利用〉

早稲田大学学生　有山　高広
東京大学学生　須島　充昭

■8月（72グループ、延五、六九一人）

東京大学講師　川人　博
芝浦工業大学建築二年ゼミ
東京工業高等専門学校大韓民国政府派遣専門大学生研修
大妻女子大学教授　隈部　直光
中央大学学生相談室
日本女子大学教授　久保田文次
明治学院大学助教授　茨木　尚子
東京工業大学コール・クライネス
一橋大学保健管理センター
工学院大学教授　塩田　一路
東京理科大学大澤ゼミ
東海大学プレイボックス
明星大学通信教育部
青山学院大学・明治大学渡邉ゼミ
駒澤大学教授　寺中　良一
日本女子大学講師　坂田　仰
学習院大学教授　高橋　利宏
中央大学通信教育部
東京理科大学物理研究部
日本大学社会学研究会
日本大学教授　佐藤　誠
東京学芸大学教授　大熊　徹
埼玉大学教授　福岡　安則
筑波大学助教授　樽川　典子
中央大学教授　長内　了
東京都立青梅東高等学校
大月市立大月短期大学助教授　大柴　建一
フェリス女学院大学室内管弦楽団
青山学院中等部ハンドベル部
神戸芸術工科大学
佼成学園高等学校数学研究同好会
国立音楽大学牧野正人門下
東京神学大学公開夜間神学講座
東京都立玉川高等学校演劇部
産能大学助教授　玉木　彰
晃華学園聖歌隊
昭和大学医療短期大学看護婦（士）実習指導者講習会
福島大学教授　千葉　悦子
現代と経済
数論セミナー
現代経営学研究会
日韓学生会議
日本国際連合学生連盟
日本青年エスペラント連絡会
イスラーム地域研究プロジェクト2班
言語研究会
フェミニストカウンセリング研究連絡会
山王教育研究所
歴史教育者協議会
文学教育研究者集団
才能教育研究会
相模原キリスト教会
若者の聖書集会
ライフミニストリーズ
AITC
大久保無教会集会
FORUM寺子屋
社会医学技術学院
子どもとつくる生活文化研究会
青山心理臨床教育センター
中山テニスクラブ
八南作文の会
朝日カルチャーセンター・横浜

環境管理センター＊／国土庁／国際商事法研究所／ローヤル電機／家づくりの会
〈個人利用〉
お茶の水女子大学学生　本郷　朝香

■9月（80グループ、延二、五七二人）

東京学芸大学教授　並河　一道
帝京大学教授　柴川　林也
法政大学教授　下斗米伸夫
早稲田大学絵画会
東京工科大学助教授　大山　恭弘
埼玉大学教授　山口　和孝
東京大学教授　内宮　博文
立教大学英米文学研究科
学習院大学教授　新川　哲雄
東京外国語大学教授　中野　敏男
法政大学多摩ＣＳＳ看中会
早稲田大学絶対安全ピン
明治学院大学講師　市野川容孝
駒澤大学講師　風間　秀人
成蹊大学教授　宇野　重昭
明治大学教授　長岩　寛
中央大学講師　木下　徳明
東京学芸大学ハイブリッドゼミ
立教大学集中合同講義１
東京大学助教授　武川　正吾
杏林大学助教授　平泉　貴士
法政大学教授　三浦　孝夫
東京経済大学助教授　森反　育夫
東京経済大学教授　寺地　五一
明星大学教授　塚田　紘一
電気通信大学教授　渡辺　坦
中央大学教授　中野目善則
明治大学教授　飯田　和人
大妻女子大学教授　小林　昌夫
大妻女子大学教授　大野　清志
桜美林大学教授　木下　裕一
桜美林大学教授　佐藤　憲正
東京大学助教授　藤原　帰一
一橋大学教授　土肥　恒之
明治学院大学講師　道又　爾
明治大学教授　牧野　誠一
中央大学教授　高窪　利一
青山学院大学講師　横谷　輝男
東京都立大学助教授　大塚　和夫
明治大学教授　播　里枝
千葉大学教授　清水　幹夫
青山学院大学助教授　井上　孝
東京都立科学技術大学アンサンブル
千葉商科大学体育会フレッシュマンズキャンプ
明治大学教授　山本　恒
埼玉大学助教授　伊藤　孝
東京都立大学教授　深貝　保則
一橋大学教授　田近　栄治
中央大学教授　林　正樹
東京都立短期大学講師　小池　幸造
駒澤大学教授　相田　敏彦
東京大学助教授　寺田　実
上智大学教授　道又　爾
東京都立大学助教授　川田　誠一
都留文科大学教授　畑　潤
秀明大学助教授　山口　桂子
玉川大学講師　田淵　俊人
東京商科学院専門学校コミュニケーション合宿
川村学園女子大学講師　有元　典文
亜細亜大学助教授　植村　利男
二松学舎大学教授　呉　英元
創価大学児童文化研究部
立正大学講師　後藤　範章
敬和学園大学講師　福王　守
獨協大学教授　大竹　孝司
駿河台大学助教授　渡辺　裕子
国士舘大学講師　平石　正美
宮城大学教授　半田　智久
亜細亜大学教授　永綱　憲悟
認知心理学若手の会
第５回大学院生心理臨床研究集会
第16回大学教員研修プログラム
郡内研究会
地域社会教育実践研究会
アカー
キリストの教会伝道学院
鉄道総合技術研究所コーラスグループ
自主学童クラブ指導員
〈個人利用〉
アドバンスト・ソリューションズ　星　明延
仙台法務局　佐藤　俊信

館長室から

今年は梅雨がそのまま秋雨につながったような季節の移り変わりで、秋を迎えてもいま一つ「灯火親しむの候」という実感を抱き難い。これも異常な気象のせいであろうか。

最近セミナー・ハウスでのある集まりで、読み書きの基礎力が話題になったことがある。今日の情報化の時代に、あるいは情報化の時代だからかもしれないが、読み書きなどいわゆる「活字離れ」の現象にも話が及んだ。

これと関連して、最近テレビ放映された国際児童図書評議会世界大会における皇后さまの基調講演「子供時代の読書の思い出」は非常に感銘深く示唆に富むものであった。書物の乏しかった戦時下に辛うじてお読みになった読書が、いかにひとの思いを高く豊かに広げてくれたかをやさしく語られた内容である。

人類は数千年以上の昔に文字を創り出し、地域も時代も超えて情報を伝えかつ学ぶすべを編み出した。これこそは情報技術の原点であろう。その大切な原点が、新しく多様な情報メディアの氾濫のなかに埋没しかかっているとすれば心配でもあり勿体ないことである。

例年のように爽やかな秋晴れの日々を迎えて、気持ちよく働いた夕べには、読書という人類の築いた素晴らしい世界に飛翔できる時をもちたいものである。

（佐野）

表紙の写真＝去る9月18日、ハウスで開催された協力会員校事務連絡会の全体協議の模様。

セミナー・ハウス
1998年7・8・9月分（年4回）
第152号
発行＝財団法人　大学セミナー・ハウス
〒192-0372　東京都八王子市下柚木1987
TEL0426-76-8511　FAX0426-76-1220
URL http://www.mesh.ne.jp/iush/
振替口座　00150-1-74590
発行人＝佐野　博敏
編集＝大学セミナー・ハウス企画室
制作＝中山企画
SEMINAR HOUSE
The Quarterly Journal of Inter-University Seminar House
No.152 (July～September, 1998)